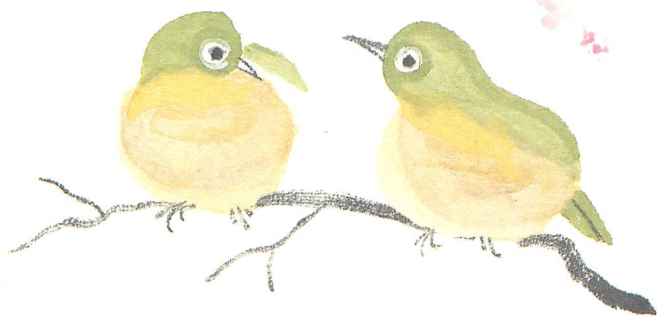


みめじみの

第26部



みめじみの

第26部



5

大谷光道著

目次

お釈迦様は？（その二）	2
共同作業	3
私はふつう	12
カメレオン	17
デザートはどこに入る？	22
皆様へ	28
大谷本願寺寺務所掲示板	29
お知らせとお願い	30
あとがき	32

お釈迦様は？（その二）

前号（第二十五部）をお読みくださった方の中から、「阿弥陀様の教えをお釈迦様が説いてくださったとは知りませんでした。」とか「アミダさんとオシヤカさんとホトケさんの区別がよくわかりました。ホント、これらがごちゃ混ぜになっている人が多いのではないのでしょうか、小生だけでなく。」などのお話を頂戴し、お釈迦様のことを書いた意味をいま一度味わうことが出来、ありがたく、嬉しく思っていました。しかし同時に、このことをもつと早くお話ししなかったことが悔やまれます。それどころか、お釈迦様がこの世にお生まれになった目的そのものが「阿弥陀様の教えをお説きになるた

めであった」のですから、なおさらです。今まで『みめぐみの』を二十五部も書いてきて、我ながら情けないことです。

仏法のわかりにくさは意外にこのような入口の部分にあって、それが不明確なままになっていて「今さらそんな基本的なこと質問出来ないし……。」とっておられたり、「何となくモヤツとしたものはあったけど……。それだ、それがわからなかったのだ。」と気づかれた方が、たぶんこのほかにもおられるでしょう。二階建ての家を造った大工さんが、二階の部屋の使い方が説明されていて、階段を付け忘れていたようなものです。二階が広いと階段はたくさんあったほうがいいので、今後も階段の設置場所発見に努めようと思います。

共同作業

それでは次に、お釈迦様と阿弥陀様の関係がよくわかる、お二方の「共同

作業」のお話をしましょう。

旅人が一人、西に向かって百里千里の旅をしている。

ある時、突然目の前に二つの河が姿を現した。一つは火の河で南方に果てしなく続き、もう一つは水の河で北方に果てしなく続いていた。河幅はいずれも百歩くらいなのだが、深さは底知れない。この火の河と水の河の中間に一本の白い道があるが、その幅は十五センチほどしかない。北側の水の河は波立っていて、この細い道を洗っている。南側の火の河も炎を上げてこの道を焼いている。水と火が交互に道にかぶさり、途切れることがなかった。河の手前は広々としているが、ここには頼りに出来るような人は一人もおらず、多くの賊や悪獣たちがこの旅人が一人であるのを見て、我先に迫ってきて殺そうとする。

旅人は死を怖れて西に走ったものの、この大河を見て心に思った。「この

河は、南北に終わりが見えない。中間に一つの白道が見えるが、それは極めて狭い。向こう岸までは近いように見えるけれども、どうして行くことが出来るだろうか。今日、私はきつと死んでしまふに違いない。帰ろうとすれば、群がる賊や悪獣たちが次第に迫ってくる。また、南北に逃げようとすれば、悪獣や毒虫が我先にと迫ってくる。それで、西に向かって道を渡ろうとすれば、きつとこの火か水の河に落ちるだろう。」と。恐れおののくこと、言葉では言い表せないほどだった。

そこで思った。「私はいま、戻つても死ぬだろう。ここに留まっても死ぬだろう。進んでも死ぬだろう。どうしても死を免れないなら、むしろこの道を尋ねて前に向かって行こう。何しろこの道があるのだ。きつと渡れるに違いない。」と。

このように心を決めたとき、東の岸に人の声が聞こえた。「そなたは、心を決めてこの道を尋ねて行きなさい。決して死の難はないだろう。もし留ま

れば、即座に死ぬだろう。」と。

また、西の岸の上に人がいて呼びかけた。「汝は、一心に念じてすぐに渡つて来るがよい。私はよく汝を護るであろう。火の河、水の河に落ちることを恐れるな。」と。

旅人は、こちらからは「渡つて行け」と勧められ、向こうからは「こちらに來い」と呼ぶ声を聞き、はつきり決心することが出来て、まっすぐに白道を進んだ。疑い、怯え、^{おび}退く心を生ずることはなかった。そして一歩二歩歩いたとき、東岸に群がる賊たちが呼びかけてきた。「旅人よ。戻つて來なさい。その道は危険だ。渡るのは無理だ。死ぬに違いない。我々は君に危害を加えようというのではない。」と。

旅人は、この呼び戻す声を聞いたけれども、それを顧みることなく一心にまっすぐ進んで道を念じて行ったところ、わずかの時間で西岸に到達することが出来、多くの難を離れることが出来た。

そこでは、多くの善き友が待っていて、喜び楽しむことがつきなかつた。

これは善導大師が、「極樂往生を願っている一切の人に言っておきたいことがある。私は今一つの喩えたとを説いて、皆の信心をより堅固なものにして外からの誤った考え方に惑わされるのを防ごうと思う。」と仰って説き始められたもので、「二河白道にがびやくどう」と呼ばれる譬え話たとです。「二河白道」は大師の代表的な著作『観無量寿経疏しよ・散善義さんぜんぎ』の中で述べられています。

またこれはそのまま善導大師ご自身の信仰体験と考えられ、念仏の教えをいただく私たちの信心が決定けつじようする一つのお手本とも言えるでしょう。

この後大師は、この場面を構成する一つ一つの要素について、説明を加えられます。

東 岸・娑婆の火宅のことである。(煩惱に悩まされる状態を火事になつ



二河白道の図

た家にたとえて、「火宅」と言います。煩惱が盛んで落ち着いていられないことは、自分の家が燃えているようなものだということです。私たちの現世での日常です。)

西 岸…極楽浄土のことである。

賊や悪獣が群がる…現世の人々が享樂に耽^{ふけ}っている姿を賊や悪獣にたとえる。

広野の広々としたところに来て、人が一人もいない…いつも悪友に随って真の善知識^{ぜんぢしき}に遇うことがないということである。「善知識」というのは仏法を説いて人々を導く人のことですが、旅人がそのような人に遇わなかったということですよ。

水の河…衆生の貪愛^{とんない}は水のようなものである。(水は旅人自身の心にも潜んでいる貪愛の情を表しています。貪愛とは欲しいと思う対象に対する異常なまでの強い執着で、貪りのことです。私たちは、喉が渴いているときは水を

飲まないではいられないという衝動に駆られます。貪りがなぜ水なのかという、**「喉の渴いた人が水を欲しがるような激しい欲望」**ということから、貪りを水にたとえます。

火の河…衆生の瞋憎しんぞうのようである。**（瞋りいかと憎しみの激しさを火で表しています。同じく旅人自身の心の中にも眠っている瞋憎の心を表しています。）**

中間の十五センチほどの白道…白い汚れのない道は衆生の貪りや瞋りの煩惱の中にでも、浄土に往生したいという清らかな心を生み出させる力があるのにたとえる。しかし、煩惱が強いので水や火のようであると言い、善心はわずかであるので白く細い道ようだというのである。

水の波が常に道をうるおす…貪愛の心が常に起こって、善心を汚染するのにととえる。

火炎が常に道を焼く…瞋り憎む心が修行の功德を焼いてしまうのにととえ

る。

道の上をまっすぐ西に向かう…他力念仏の道をまっすぐ西方に向かう。

東の岸から「心を決めてこの道を尋ねて行きなさい」と人の声がして、道
を尋ねて直ちに進む…お釈迦様はすでにおいでにならないので拜むことは出
来ないが、教えがあつてこれを訪ねるべきだということで、「お声のよう
だ」とたとえるのである。(ここは「お釈迦様のお声である」と言つてしま
つたほうがわかりやすく、二河白道の絵も必ずお釈迦様の絵が描いてありま
す。ただ正確に言うと、善導大師のご注釈の通りでなければなりません。)
一歩二歩行つたとき、賊や悪獣が呼び戻す…仏法について別の考えを持つ
た人たちや、間違つた考えを持った人たちが妄みだりに彼らの見解をかわるがわ
る説き「君は自ら罪を作つて往生という利益を失つてしまふだろう」と人々
を惑乱することを賊や悪獣にたとえるのである。

西の岸に人あつて呼ぶ…弥陀の本願の意を、西の岸から呼ぶ声にとえる。

(これも東の声と同じく、「阿弥陀様のお声である」と言ったほうがわかりやすいですね。)

わずかの時間で西の岸に至って、善き友と遇って喜ぶ…衆生は久しく迷いに沈んではかりしれぬ昔より輪廻(生まれ変わり死に変わり)し迷い続け、ここから逃れるすべを持っていない。お釈迦様が西方に向かえと押し遣り、阿弥陀様が大悲心を以て呼んでくださるので、いま二尊のお心に随って、水火二つの河を顧みず、いつも忘れず信心相續するならば、阿弥陀様の本願力に乗って、この世での命が終わったなら、彼の極楽浄土に生まれることが出来、仏様方とお会いすることが出来、喜びが極まりないことをたとえるのである。

私はふつう

「衆生をお浄土に迎えて生まれさせねばおかない」という阿弥陀様のご悲



願とそれを説かれたお釈迦様の教え、お二方の、平たく言って「役割」が、この二河白道のお話でよくおわかりいただけたと思います。

旅人は極楽往生を願う私たち凡夫の代表で、「二河白道」はその名の通り旅人の前途を阻む二つの河と真ん中の白い道がこの物語の中心であります、それは同時に浄土教の要を表す図でもあります。二つの河は旅人自身の煩惱であり、白い道は弥陀の本願であり、またそれを信ずる旅人の信心です。

そもそも仏教は、私たち人間の持つ

煩惱を特に問題にする教えです。それは、覚りという完全な自由に至るのに、煩惱というどうしようもない壁が目の前に立ちほだかっているからです。この壁を越えたり壊したりするのに、一方に修行があり（聖道門）、また一方に阿弥陀仏の本願力（浄土門）があり、するのです。

他の宗教、たとえばキリスト教やイスラム教などの場合は神と人間の契約がすべての基本になり、「絶対神と自分」という図式が基本になるので、煩惱ということはまず問題にされることはないようです。ところが仏教の場合は、どうしても覚りを目指す私たちとそれを阻む煩惱という図式になってしまします。角度を変えて見ると、「煩惱という壁が成仏に向かうための決定的な契機、チャンスになる」とも言えます。

「煩惱」はいつもお話しするように、中心となるものは貪欲・瞋恚・愚癡（痴）で、私たちは実際はこの三つに悩まされているのですが、ほとんどそれに気づかず毎日を送っているのではないのでしょうか。



他人の持っている物や他人の境遇がうらやましくて仕方なく、あれもこれも求めて手に入らないとそれを苦しめて、いつも欲求不満が続きます。また、欲しいものが手に入ったら入ったまま次のものが欲しくなる。

しかし「欲があるのは人間として、動物として当たり前だ。」と片付けてしまっています。

また、つまらないことに腹を立て、喧嘩になる。よく言えばプライド——誇り——と言えるのかも知れませんが、我を張って「わしはこれほどのもの

だ。」と他人に認めさせたいという思いが心の中に潜んでいるので、相手が認めてくれないと怒りがこみ上げてきて、爆発してしまいます。最近の言葉では「キレル」ことになります。

しかし何らかの解決をしたり、日にち薬で、やがて何事もなかったかのようになるので、忘れてしまいます。そして「腹が立つのは人間として当たり前だ。」と片付けてしまっています。

もう一つは愚癡です。無明とも言ってもそもそも智慧のないことが原因なのですが、「こうなればいいのに。」「ああなればいいのに。」「ああすればよかったのに。」と、言っても詮のないこと、考えても実現しないことを、あるいは努力もせず、労力も尽くさず、自分の至らなさを棚に上げてぶつぶつ言うのが愚癡です。これも「誰もがやっていることだから当たり前だ。」として片付けてしまっています。



カメレオン

最近報道される事件は以前とはだいぶ様相が違ってきています。

ふつうにはどうしても動機を理解できない殺人事件が多くなっていることもあるいは根は一つなのかも知れませんが、建物の強度偽装、嘘の情報による株価の不正操作、天下り官僚の談合事件等々、以前では考えられなかった欲望むき出しの事件が目立ちます。そこには「利益追求のためには何でもあり」を是とし、さらにこれぞアメリカ

ン・ドリームならぬジャパニーズ・ドリームとして鼓吹^{こさい}してきた我が国全体の風潮があったことも否めません。

たとえば、今まで企業買収の一人のヒーローを作り上げてきたマスコミも、今度は株価不正操作の容疑者として論調を逆転させ、このヒーローを極悪人に塗り替えている事件があります。その中で、特に私の記憶に焼きついたのは「人の心も金で買える」というこの人のひと言です。こんなことが本に書かれていると聞いたとき、「何と。そういう人が出てきたのか。今の世の中はそこまで言わせて、それを許して来たのか。」と思い、数日の間マスコミの報道に注目していました。

そのうちに、ふと次のようなことが脳裏をよぎりました。

「もし私自身が同じ環境で、同じ立場に立っていたら、さらに私がその業種にいて同様の経歴を積み上げていたとしたら、ひょっとして『人の心も金で買える』というようなことを言ったり思ったりは、決してし

なかったらどうか。」

「あるいはその逆の、心を買われる、つまり心売るほうの立場に立っていかも知れない。そのとき私はどうしただろうか。」と。

そう考えると、背筋を走る寒いものがありました。

おそらく実際に売るほうの立場にいた人がいたから、あのようことを豪語したのではないかとも思われてきます。

こんなことを考えていると、親鸞聖人がお弟子の唯円ゆいえん房と話された故事を思い出しました。

聖人..唯円は私の言うことを信ずるか。

唯円..はい。

聖人..それなら、私がいまから言うことに違たがわないだろうか。

唯円..はい、もちろんです。

聖人…たとえば、人を千人殺してみろ。そうすればお前の往生はきつと定まるに違いない。

唯円…いやー、仰せではありませんが、一人たりともこの私の器量では殺せるとは思えません。

聖人…それではどうして、親鸞（私）の言うことにきつと違わないと言ったのか。

唯円…：

聖人…これでわかるだろう。心に任せて何事もやれるならば、往生のために千人殺せと言えば、そのまま殺すだろう。しかし一人も殺すような縁にもよお催されないので殺さないだけなのだ。自分の心が善いから殺さないのではない。また殺さないでおこうと思っても百人千人殺してしまうこともあるはずだ。〔歎異鈔〕、『口伝鈔』

「私がその人と同じ環境に置かれたときに、本当に私は大丈夫だろうか。」と、考えてみてください。私たちが生まれながらにして備えている煩惱は人によって強弱の差はあるとしても、ひとたびそれを増長する縁に触れると急にふくれあがる素質は誰しも共通だと考えるべきで、事件のやり玉に上がった他人を指して笑っているわけにはいきません。

このように見てくると、煩惱なるものの実体がわかってくると思えます。

「人間というのは弱いものだ」とはよく使い古された言葉ですが、環境によつ

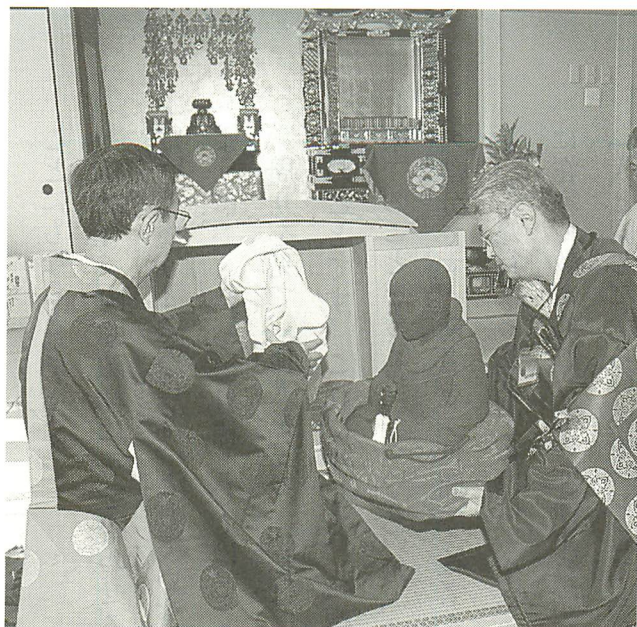


てカメレオンのように変化するもののようにです。この豪語の主を見ていると「人の振り見て我が振り直せ」ということになるので、私たちの反面教師とも言えます。

二河白道の情景をもう一度振り返ってみてください。私の前の火と水が前とは違ったものに見え、「ある旅人」の話が私のこととして味わわれてくるでしょう。

デザートはどこに入る？

さて先ほど、ふだんの生活の中で煩惱を煩惱と気づかぬまま「誰でもやっていること」として片付けているとお話ししました。いま、人間の弱さ、どのような縁に催されて何をしでかすかわからぬ私を考えていただきました。私たちははたいいていの物事を「良いか、悪いか」で決める癖がついています。しかし「欲がある」とか「腹を立てる」ことについては、良いか悪いかでは



結論が出せません。誰でもやっていることだからふつうのことだと言われれば、良いとも悪いとも言えません。ただ、危険な状態であるとは言えるでしょう。欲しいものがどんどん手に入る状態をそのまま放置しておく、「人の心も金で買える」などと言い出すことになるかも知れません。

そこで、良い悪いという尺度よりも、「気持ちがいいか、そうでないか」ということを問題にしようと、いま提案したいのです。「より気持ちよく生きる」ということが、仏教の最終目的地である覚りにとまではとても届かないにしても、少しでもその方向に向かう

ことにもなると言えます。

私たち、阿弥陀様に手を合わせる者は、「人と同じだからそれでいいのだ」というところにじっとしてしないで、「もっと気持ちよく生きて行けるように」、を一つの目標としてはどうでしょうか。

周りを見て、他人を見て、「私はふつうだ」というのは「日常生活」の範囲のことです。これに対して、仏様を見て、お念仏を称えて、お浄土（極樂）のことを考えて、というのは「非日常」と言える私たちの「心の生活」の部分です。前者を「世間」、後者を「出世間しゅっせけん」とも言います。山の中に籠こもって修行する生活であれば、生活のすべてが出世間ですが、私たちのように在家で教えに触れていく浄土真宗では、いつもこの両方の状態があります。「人と同じだからいいや」として「良し」としているのであれば、仏教は要りません。「より気持ちよく生きる」ために、仏様のことを考え、お念仏を称えることが、生活のどれだけかの小さい部分でも占めているように、つま

り出世間の部分がいくらかでもあるようにしたいものです。そうすれば、私たちの心の一番深い部分にお念仏の燈とも火しびがいつも点り続けるようになるのです。これによって私たちには仏様に「導かれる」「護られる」生活が実現します。

私たちの心の中に「日常」以外の「非日常」の領域が作られることは、「デザートやお寿司は別腹に入るのだ」というように、食事でお腹が膨れても物によっては「別腹」に入るといふのと同じです。



私たちは誰しも、何かの縁に催されて一時は横道にそれることがあるかも知れませんが、阿弥陀様のご本願を信じ念仏を称える生活をしていれば、必ず軌道修正されて元の生活に戻ることが出来るはずで、仏様に護られるというのは、外敵から物理的に護られるということではなく、心のレールから脱線しないように、また少々外れても元に戻るようになさる事だと思えます。

こういうイメージに二河白道はぴったりで、私たちの信心を護るためにこの喩えを説くのだと言われた善導大師のお心が、重ねてしのべれます。

少しでも多くの方々が、信心という別腹を持って、仏様に護られる生活をしていただきたいと思います。

前号で、お釈迦様と阿弥陀様の関係から始まって、お二方の二河白道という「共同作業」のお話をし、仏教の根本課題である煩惱について、その見

け方、対処の仕方についてのお話に及びました。

お釈迦様と阿弥陀様の関係を説明するのにわかりやすい事例はほかにもあります。

もう少し、このお話を続けたいと思います。

(以下次号)

《参考文献》

1. 『聖典意訳七祖聖教』 浄土真宗本願寺派出版部
2. 『教行信証の意識と解説』 高木昭良著 永田文昌堂
3. 『和訳善導大師観経四帖疏』 村瀬秀雄訳 常念寺





皆様へ

筆者

昨年十一月には、お陰をもって新寺務所の二階の仮御堂に御本尊はじめ諸尊に無事御安着いただくことができました。私も、イノシシの気配や間近に鳴くフクロウの声を聞きながら間もなく四ヶ月となり、初めての嵯峨野の春を待つこの頃です。

毎日のご崇敬はもとより、毎月二十八日の宗祖聖人御命日にはお講を開き、有縁の皆様と有意義な一時を過ごしております。また長らく途切れていた大谷楽苑のコーラスを再発足いたしました。このほか順次新しい企画を実現してまいろうと、胸を膨らませているところです。

今後とも皆様方のいっそうのご協力をお願いいたします。

お釈迦様は？(その二)

大谷本願寺寺務所掲示板

☆お講 毎月 二十八日 午後二時～四時
「みめぐみの」のバックナンバーの解説なども行っています。

☆大谷楽苑（コーラス）
毎月 二十八日 午後四時～六時
讃仰歌を中心に練習しています。

☆お雛さま
歌徳院（智子前裏方）様のもものも含めて江戸時代（二百年余り前）から伝わる大谷家のお雛さまを四月中旬までの予定で飾っています。

☆前門様（闍如上人）十三回忌
四月十三日 午前十一時より

ご来所の折は事前にご連絡くだされば幸いです。



お知らせとお願い

本願寺寺務所移転建設実行委員会

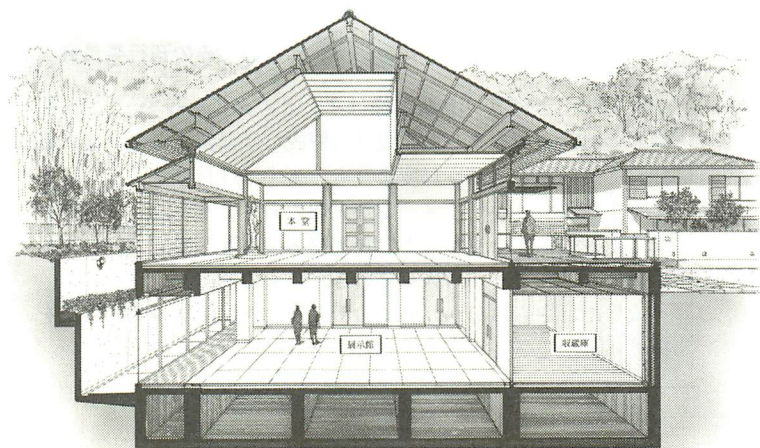
昨年十一月二十七日には、各方面よりのご来賓と全国から多数の僧侶、御門徒の参詣を得て、光道台下の御親修のもと、御遷座御着法要並びに寺務所落成法要が厳修され、また記念式典が盛大に執り行われました。これにより寺務所二階の仮本堂には御本尊阿弥陀如来、親鸞聖人御真影（木像）をはじめ諸尊にご安座頂き、ここに大谷本願寺は念仏弘通の確固たる基盤を得ることができました。

皆様方の温かなご賛同・ご協力、ありがとうございます。

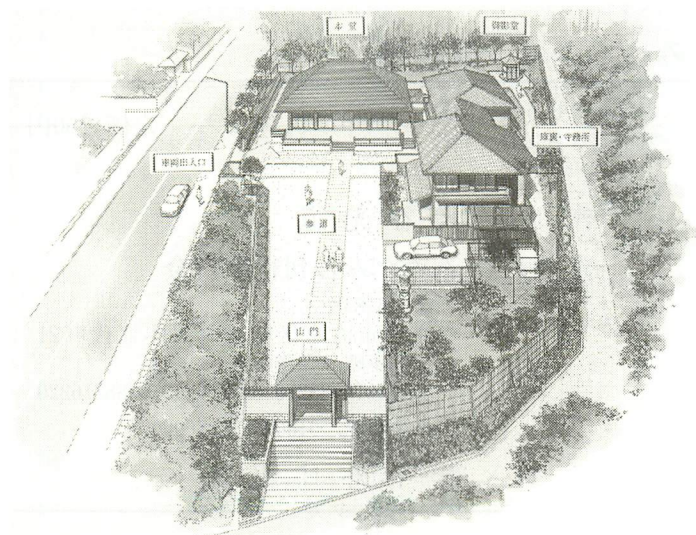
なお、大谷本願寺の伝統の儀式作法を後の世に伝えていただくためには、是非ともその「舞台」となる本堂の建設が必要不可欠です。また、本堂地下には大谷家伝来の法宝物の収蔵・展示するスペースを予定しております。

今後とも皆様の物心両面からの熱いご支援を心よりお願い申し上げます。

お知らせとお願い



本堂計画断面図



— あとがき —

みめぐみの刊行委員会

前号に引き続き「お釈迦様は？」とのタイトルで、「二河白道」のお話を頂きました。説話の解説だけに留まらず、他人と比べて良い悪いという尺度よりも、まずは「自分がより気持ちよく生きる」というイメージが大切であることを説いて下さいました。煩惱をなくすことは無理であったとしても、それを見つけていくところから入っていきたいものです。

次号ではさらに分かり易くお釈迦様と阿弥陀様の共同作業を掘り下げて下さる予定です。どうぞお楽しみにお待ち下さい。

みめぐみの 第26部

2006年3月5日 印刷
2006年3月10日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
大谷本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中外日報社



みめじみの刊行委員会刊